平成１１年度第１回総合目録データベース実務研修　個人研修レポート

図書館業務の委託と職員について

東京大学教養学部等図書課整理掛
下村　恵美子

目　次

１　はじめに
２　図書館産業について
３　整理業務の変遷
４　図書館業務の委託
５　まとめ
６　おわりに

１．はじめに

現在所属している図書館で日常業務の外注化が始まってから一年近くになり、現在の業務状況を検証してみるとともに今後外注をすすめていく図書館に対して何か示唆を与えられればと考えている。本稿では図書館を取り巻く環境を理解するためにまず、2 章で図書館産業の動向を述べ、続いて業務の変遷、委託の状況を説明し今後の職員のあり方を検討することにしたい。

２．図書館産業について

業務の外注を考える上で図書館を取り巻く企業について把握する必要がある。
そこで、吉田昭氏の大学図書館研究集会の要綱集での広告企業について分析[1)]した表をもとに図書館産業の動向を考えてみる。

この表では 1980 年から 1992 年までの要綱集を扱っているが、変化のない分野としては出版と出版流通ある。

データベースの分野ではこれまでオンラインの広告がされていたが 1987 年から CD―ROM での広告が始まっている。これは提供のデータベースがオンラインから CD―ROM へと変化していったことが推測できる。

1984 年から継続して出されているコンピュータの広告や 1987 年から掲載され、要綱集でも主要な広告の一つとなった機械化システムをみると図書館業務の機械化への歩みを読み取ることができる。図書館業務代行では 1987 年から数は少ないが掲載が始まっており、新しいベンチャー企業の出現を表している。

単純には比較が出来ないかもしれないが、『図書館雑誌』93 巻 9 号の広告から特徴のある 2 分野を見てみる。広告掲載状況は表２を参照。

表 2　広告掲載状況

分類	細分類	広告数
出版	印刷	9
	マイクロ	1
出版流通	国内書	0
	外国書	0
	古書	0
図書館物品	図書館家具	3
	図書館機器	3
	図書館用品	0
一般物品	コンピュータ	1
	ＯＡ機器	0
	一般用品	0
機械化システム	トータル目録	4
データベース	オンライン	0
	ＭＴ	0
	ＣＤ－ＲＯＭ	3
図書館業務代行	整理	1
	製本	1
	保存	2
	複写	0
その他	全般	1
	印刷その他	1
計		30

広告点数が 10 件と一番多い出版では参考図書が多くの紹介されている他に、図書館員の事務用資料も含まれている。出版社には紀伊國屋書店、日本図書館協会、日外アソシエーツ等がある。

広告の中で点数は出版に比べて少ないが 1 件辺りのスペースが多いのは図書館システムのメーカである。丸善の CALIS、ブレインテックの情報館、システム･ラボの LX、日立の LOOKS21、リコーの LIMEDIO とあるが多くのメーカーが NACSIS－CAT との関係を説明している。

３．整理業務の変遷

３．１　共同・分担目録

昭和 55 年の学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」が今日の大学図書館の在り方に大きな影響を与えたのは周知の通りである。このシステム構想の中心的機関として設立された学術情報センターが提供するＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴは大学図書館の目録業務を大きく変えたといえる。

接続機関は 1999 年 8 月 31 日現在、709(国立大学 99、公立大学 32、私立大学 332、短期大学 79、高等専門学校 49、共同利用機関 14)館になっている。[2)]

３．２　遡及入力について

利用者へのＯＰＡＣ提供の伸びと共に遡及入力も実施･計画されている。『目録の利用と作成に関する調査報告書　1998.3』[3] から大学の設置母体で比較してみると私立大学が1989 年から遡及入力が着々と進み、2000 年には完了予定館がピークに達する。それに対して国立大学では入力が始まったのもおそく、2000 年でも完了予定館が 50%に到達しない。国立大学への積極的な入力事業の推進を望む必要がある。

３．３　整理担当職員

『大学図書館実態調査結果報告』[4] 昭和 61 年度から平成 10 年度までのⅡ．個別事項１．図書館･室職員　１－１職務内容別統計を時系列に編成すると表３になる。

12 年の間に整理部門の担当職員構成比は全大学の平均で 24.7%から 19.1%へと低下している。構成比率が平成 10 年度で一番高いのは私立大学であり次に国立大学、公立大学の順になっている。公立大学に関しては設置母体の中で 12 年間に 9.1%の比率低下を示している。

表３ 整理担当職員構成比の推移

	区分				
年度	国立大学	公立大学	私立大学	全体	
昭和61	20	22.9	27.8	24.7	構成比％
62	19.2	23.1	27.3	24.3	
63	18.9	22.6	26.8	23.9	
平成元	19	22.2	26.2	23.6	
2	19.1	23	26.3	23.7	
3	19	23.3	25	22.9	
4	18.2	22.4	24.5	22.4	
5	18.4	19.5	23.7	21.8	
6	18	19.7	22.8	21.1	
7	17.4	18.2	21.8	20.3	
8	16.9	15.2	21.5	19.8	
9	16.8	13.4	21.1	19.4	
10	16.6	13.8	20.6	19.1	

４．図書館業務の委託

４．１　委託の変遷

『大学図書館実態調査結果報告』昭和 61 年度から平成 10 年度まで外部委託業務の項目を時系列で編成したものが表３．１、３．２、３．３、３．４である。昭和 61 年度から委託が進み、完全に図書館内での仕事から離れいるのは製本業務である。清掃、警備業務と度合いの高いものが続く。雑誌の製本や古書の修理製本を行う場合、特別の機器や技術を伴うため、製本業務の委託が高くなっている理由と考えられる。清掃、警備業務は図書館単独というよりは大学の建物管理のあり方が影響している。近年、委託業務として伸びているのは、私立大学、公立大学で顕著であるが情報処理業務である。平成元年、２年ごろから伸びが高くなっており、大学での図書館システムの導入だけでなく、情報センターとしての役割を担い始めている中で情報処理技術を外部に求めた結果といえる。整理業務は昭和 61 年度ぐらいにはそれほどなされていないと考えていたが私立大学では 20%を

超えており、国立大学が平成 10 年に 10%になったのにたいし、20%を超えている年度がほとんどである。全体をみると私立大学での業務委託の高さがめだち、国立大学との違いが明確になっている。

表 31国立大学の 外部委託業務

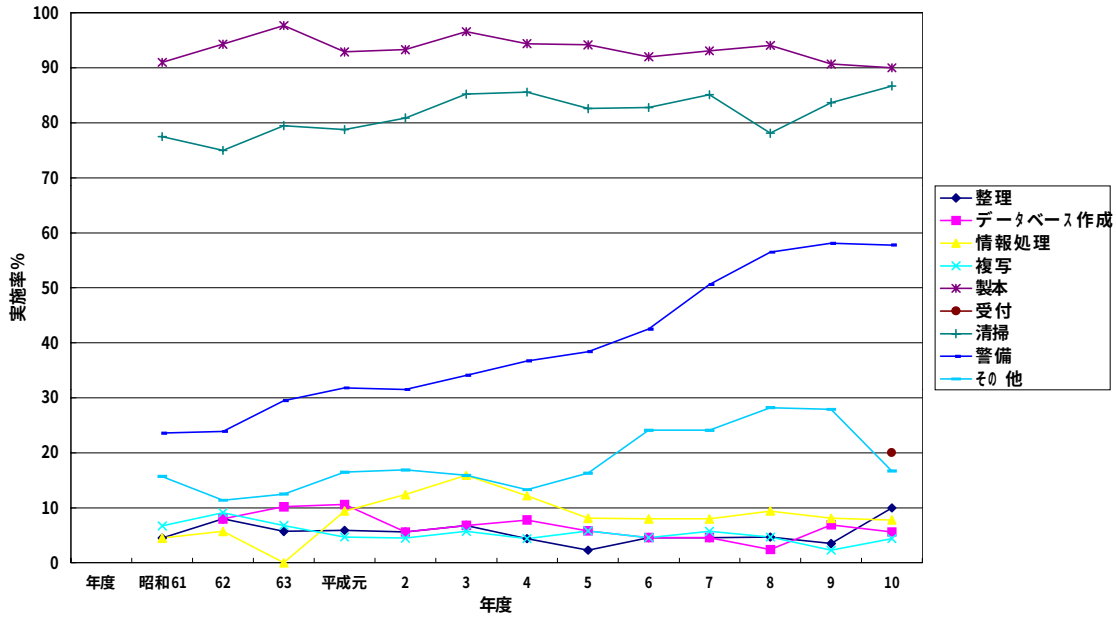


表 32公立大学の 外部委託業務

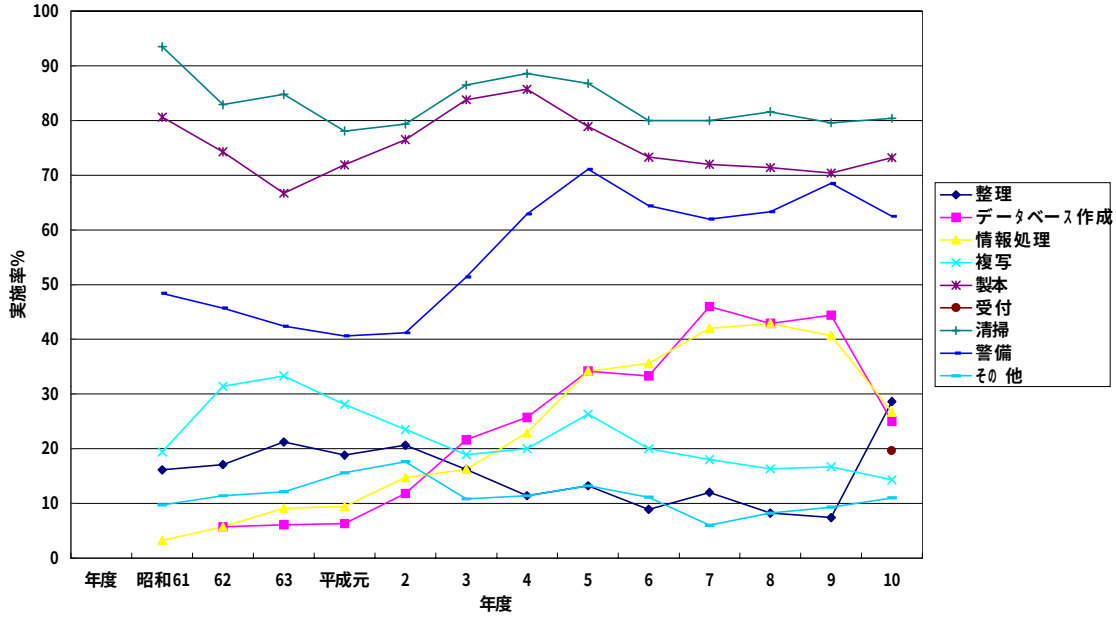


表 33 私立大学の外務委託業務

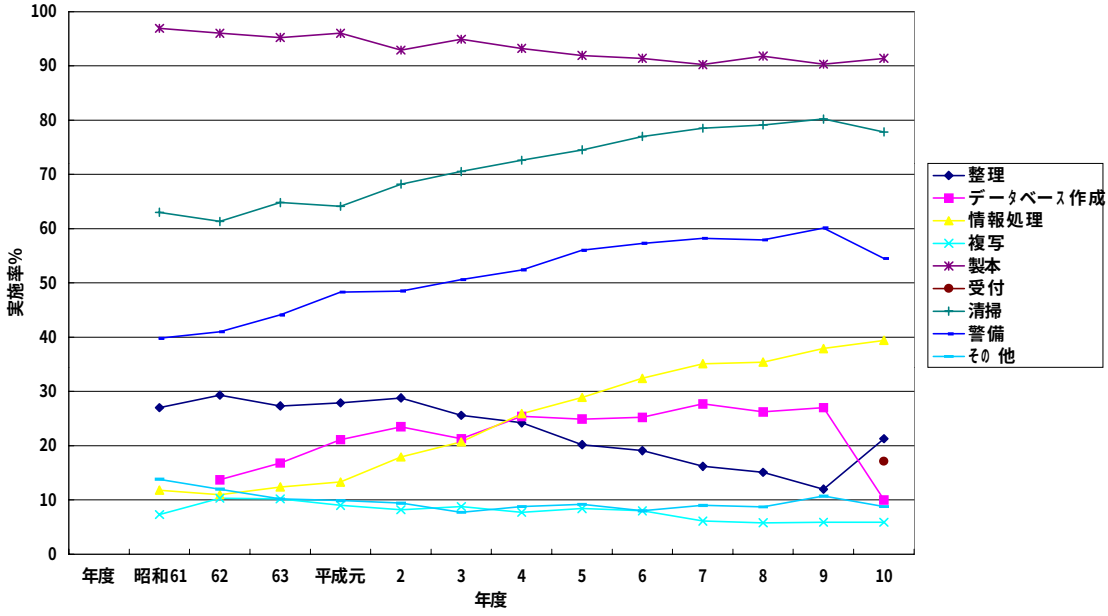
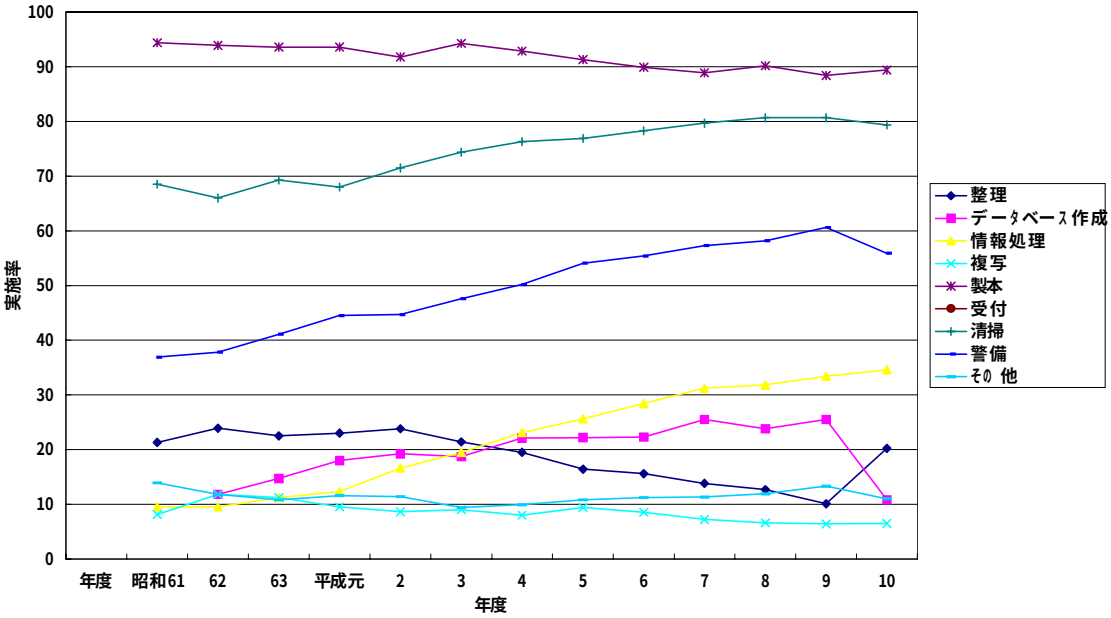


表 34 大学の外部委託業務



４．２　東京大学教養学部図書館での委託

東京大学教養学部図書館では平成 10 年 11 月から図書館流通センター(以下　ＴＲＣ)に学部図書館配架の新刊書の受入･整理業務を委託した。業務の主な流れは、表４の通りである。

表４　ＴＲＣ外注に伴う資料の流れ

受入掛

・資料の見計らい、選定
↓　・閲覧掛に発注する資料の ID-No.、冊数、受取予定日を連絡
・整理掛に資料の発注リストと資料現物を渡す

整理掛

・請求記号の付与
↓　・ OPAC 格納チェック用のリストを作成

受入掛

・ＴＲＣへの発注準備
↓　・ ID ラベル・発注資料の確認

ＴＲＣ

・原簿の作成
↓　・資料の装備
・NC 入力時の log の作成（以下 FD）

受入掛

・発注資料と原簿の受取りの確認
↓　・閲覧掛に資料を渡し、受領記録（ID ・冊数　等）を連絡
・整理掛に受け取ったＦＤを渡す、OPAC 格納の確認

閲覧掛

・装備の内容と請求番号の背ラベルの確認

＊外注業務全般について、特に問題が生じた場合、受入掛の担当者に連絡し、業者と連絡をとる。
＊NC 入力についての連絡は、整理掛長をとおして、業者と連絡をとる。
＊学生希望図書においては、ＴＲＣに外注せずにこれまでの資料の流れとなる。

（東京大学教養学部図書館整理掛“ 業務マニュアル ”から抜粋）

①選書はＴＲＣＭＡＲＣを元に作成されたデータが受入掛から選書担当者（教官、職員で構成）に毎週メールで送られ、担当者は選んだ資料にチェックをいれ、返送する。返送データを元にＴＲＣから月単位で見計らいが届き、最終的に購入するかを検討する。

②閲覧掛に選定された資料のＩＤ－Ｎｏと冊数、納品予定日を連絡する。
資料現物はリストと一緒に整理掛に渡す。

③整理掛では資料現物に請求記号を付与するほかＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴへの所蔵登録時に必要なＬＤＦフィールドに記述するコードの指示をする。

④受入掛は整理掛での作業が終了して資料についてＴＲＣで装備するＩＤラベルと発注資料を確認し、資料を箱詰めにする。毎月第４月曜日に運送会社へこの資料を受け渡す。

⑤ＴＲＣへ受け渡された資料について図書原簿の作成とＩＤラベル、請求記号のラベル付与、ブックディテクションシステムの磁気テープの付与、ペーパバック図書へのブッカーかけの一切の装備のほか、ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴへの登録をする。ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴへの入力時のｌｏｇをＦＤの形で保存する。

⑥一ヶ月後（第４月曜日）に納品される。受入掛は受け取った資料と図書原簿を確認し、閲覧掛に資料を受け渡す。整理掛は④のＦＤをもらい、ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴ入力データのローカルＤＢへの格納確認をおこなう。

４．３　整理業務委託の利点と問題点：　東京大学教養学部図書館の委託をもとに

４．３．１　利点

１．　新刊書を定期的に配架出来るようになった。
　整理業務担当者はできるだけ早く利用者の目に触れるように仕事をすすめていると思うがその担当者は整理業務だけでなくその他の図書館業務〈例：　システム管理、図書館の運営など〉と平行して仕事をしていることが多い。そのため、整理の仕事が遅くなってしまうことがある。その時に整理の遅れをなくしてくれる。

２．　内部での人材開発をする必要がなくなる。
　人事異動できた担当者が必ずしもその業務に習熟しているとは限らず、習熟するまで整理が遅くなる可能性がある。また、新しく雇った人材に対しても同様である。

３．　委託しなかった整理に余裕をもって取り組める。
　現在のＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴでの入力はヒット率の高い資料とオリジナル入力になる資料の二分化しており、委託先で処理できないような言語の入力に対し慎重かつ正確に仕事をおこなうことが出来る。

４．３．２　問題点

１．　その業務に習熟した人材が育たない。
　委託先の業務をチェックする能力がなくなると共に他大学からのＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴでのレコード調整への対応が出来るのか疑問である。その結果、委託先がおこなった業務に対しての責任が薄れる。

２．　現物を委託先に送るため、その日の利用ができない。

５．まとめ

整理業務の中でも目録作業は専門的業務の一つとして考えられていたのは確かである。NACSIS-CAT を利用して行われる共同分担目録作業により、目録作成の時間は軽減され単純に所蔵登録を行うだけの資料と新規に書誌を作成する資料と２極分化してきている。目録業務の専門性は以前よりも薄れ、業務をになってくれる委託業者も育ってきており、定員削減が進んでいる状況の中では整理業務を外部委託することは間違ったことではないと考えている。

そこで整理担当職員は委託するにあたって以下のことを考えてみてはと思う。

①どの業務を委託の対象にするのかよく検討していくこと。
業務の仕方を振り返ってみて本当に委託が必要なのかも判断する。
日常行なっている業務での無駄を省く事も可能である。

②委託先の候補について教育体制や管理体制を調査し、信頼して仕事を任せられるのかを判断すること。
仕事の品質は委託先の管理体制に大きく左右される事を覚えておく必要がある。
業者から話を聞くだけでなく、過去に委託を頼んだ大学に仕事具合を尋ねてみる方法もある。

③常に委託先と連絡を密にしておく体制を整えておくこと。
同業者の動向や契約大学の様子を聞き、情報を集めるのに役立つ。

④委託された業務に対して、業者に任せきりになるのではなくいつでもその業務にある程度、習熟している必要があること。
委託業務のチェックを行う上で必要であるとともに、緊急に内部で仕事をする場合に備えるためでもある。

６．おわりに

業務委託の問題は担当者だけの問題ではなく図書館のあり方を考えなおす良い機会ともいえる。図書館評価を行ない、図書館のこれからの方針を立てていく“考える図書館員”を育てる時間が業務委託によって生み出されればと考えている。将来、仕事の責任者だけが職員でその他は派遣社員というような状況を迎えるかもしれない。これからの図書館職員にはプロデューサ的な能力も要求されてくるだろう。

●　注

1) 吉田昭．大学図書館をめぐる図書館産業の動向．大学図書館研究．No.42. p.6-14 (1993.9)
2) 入手先：　＜http://www.cat.op.nacsis.ac.jp/INFO/sanka-kikan.html＞
3) 日本図書館協会目録委員会編．目録の利用と作成に関する調査報告書．日本図書館協会，1998
4) 文部省．大学図書館実態調査結果報告 昭和 61 年度～平成 10 年度

● 参考文献

1) 志保田務．集中・分担目録時代の整理業務の位相．図書館界．Vol.47，No.3．p.112-121（1995.9）
2) 永田治樹．図書館目録の現状と将来：メタデータと OPAC．情報の科学と技術．Vol.46 No.3．p.106-113（1996）
3) 田中康雄．大学図書館における目録構築の新たな試み．情報の科学と技術．Vol.46 No.3．p.114-121（1996）
4) 星健二．図書館目録構築の支援サービス．情報の科学と技術．Vol.46，No.3．p.122-127（1996）
5) 佐々木光子．大学図書館の現場からー NACSIS-CAT カタロギングリポート．情報の科学と技術．Vol.46，No.3．p.128-135（1996）
6) 森本英之著 ；越塚美加訳．情報の科学と技術．Vol.46，No.3．p.142-148（1996）
7) 新倉利江子，原田悟．図書館の経営管理．大学図書館研究．No.50．p.14-21（1996.1）
8) 佐々木克彦．企業図書館とアウトソーシング．情報の科学と技術．Vol.46，No.5．p238-244（1997）
10) 長谷川豊祐．図書館経営における課題と文献展望．現代の図書館．Vol.36，No.4．p.224-233（1998）
11) 藤岡昭治．情報館の経営戦略-大学図書館における人の問題と今後の課題．現代の図書館．Vol.36，No.4．p．246-254（1998）
12) 細井孝雄．逐次刊行物業務のアウトソーシング．現代の図書館．Vol.36，No.4．p.256-267（1998）
13) 桶本みさよ，山重壮一．TRC「図書館流通診断士」が投げかけるもの．現代の図書館．Vol.36，No.4．p．288-289（1998）
14) 木内公一郎．大学図書館のアウトソーシング．情報の科学と技術．Vol.48，No.1．p.9-16（1998）
15) 日本図書館協会．「図書館業務の（管理・運営）委託」に関する実態調査報告書．1986
16) 岩猿敏生［ほか］著．大学図書館の管理と運営．日本図書館協会，1992
17) 日本図書館協会目録委員会編．目録の利用と作成に関する調査報告書．日本図書館協会，1998
18) 国立大学図書館協議会．図書館情報システム特別委員会目録業務システム専門委員会最終報告．1997.8．
入手先:http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/anul/Kdtk/Rep/54/54.html
19) 文部省．大学図書館実態調査結果報告 昭和 61 年度～平成 10 年度
20) 永田治樹著．学術情報と図書館．丸善，1997